



バラに、どうしてとげがあるの

動物に食われるのを防ぐため、とげがある

うっかりバラの花に手をのばして、枝をつかみ、とげにさされて、あっと痛い思いをしたことはありませんか。「ばら」という名前そのものは、「いばら」からきており、とげのある木をさしていました。「とげ」があるから、「ばら」とよばれるようになったのです。

こんな痛いとげがあれば、植物を食べる動物は、バラを食べにくくなります。そのため、バラのとげは、動物から食べられるのを防ぐ役目をする、と考えられています。

バラのとげは、皮が変化したもの

バラやキイチゴのとげは、もとは樹皮になる部分が、変化してできたといわれています。バラ以外の植物にも、「とげ」はあります。

サボテンのとげは、枝や葉になる部分が変化したものです。サボテンの厚い葉のように見える部分は、じつは、くきが変化して、葉のようなはたらきをするようになったのです。

カラタチや、赤い実をつけるグミ、クコなどのとげは、枝が変化したものと考えられています。

サンショウやニセアカシアなどのとげは、葉のえのつけ根の所につく、小さいそえ葉が、とげに変化したもののため、とげの出る場所が決まっています。

このように、植物のとげは、さまざまな部分が変化したのですが、くきにつくものも多く、中には、葉につくとげもあります。でも、根にとげがあるものは、まだ知られていません。(監修・矢野 亮)

